歴史とジェンダーをめぐって――バーネットの『小公子』、『小公女』、マロの『家なき子』、『家なき娘』の場合

日本女子大学教授　　川端　有子

アウトライン

1　作者の紹介
2　翻訳史、派生作品、変更点
3　四作品の紹介
4　類似点と相違点　ジェンダーの見地から
5　作品の地理的背景と世界情勢
6　発表当時の評判と、現在の評価

1

エクトール・アンリ・マロ（Hector Henri Malot, 1830 年－1907 年）

フランス、ルーアン生まれ　劇作家志望、小説家　60 余りの小説を書くが今も残っているのは 3 冊の児童文学作品のみ。『家なき子』『家なき娘』『ロマンカルブリス物語』

フランシス・イライザ・ホジソン・バーネット（Frances Eliza Hodgson Burnett, 1849 年－1924 年）

イギリス、マンチェスター生まれ、アメリカ、テネシー州育ち　イギリス生活も長いが晩年アメリカに帰化。60 余りの小説を書くが今も残っているのは 4 冊の児童文学作品のみ。『小公子』『小公女』『秘密の花園』『消えた王子』

2

作者	題名　出版年	邦題	主人公	舞台や関わりのある国
マロ	*Sans Famille* 1878	家なき子/児（まだ見ぬ親）本邦初訳：五来素行	レミ	フランス、イギリス、スイス
バーネット	*Little Lord Fauntleroy* 1886	小公子　本邦初訳：若松賤子	セドリック	アメリカ、イギリス

マロ	*En Famille* 1893	家なき娘/少女（雛燕、あゝ故郷、なつかしの故郷）本邦初訳：五来素行	ペリーヌ	（インド）フランス、（イギリス）
バーネット	*A Little Princess*（1888）1905	小公女　本邦初訳：菊池寛	セーラ（セイラ、セアラ、サラ）	イギリス（フランス）

派生作品

もとの題名	テレビアニメ化 フジ系	テレビドラマ化	映画化（主なものに限る）
家なき子	家なき子レミ 1996 放映　レミは女の子　半年放映　最低視聴率	家なき子　1994 ストーリーは無関係、女の子（安達祐実）が主人公	
小公子	小公子セディ 1988　地味で目立たなかった		メアリー・ピックフォードの小公子（母子を一人二役） リトル・プリンス
家なき娘	ペリーヌ物語 1978 放映 根強い人気		
小公女	小公女セーラ 1985 放映　いじめエピソードを膨らませ、人気が高かった	小公女セイラ　2002 放映、現代の日本の高校に翻案。先生とセイラの母親との確執が裏にあり真の主人公は先生？	テンプルちゃんの小公女（背景はボーア戦争中イギリス） リトル・プリンセス（背景は第一次大戦中アメリカ）

＊サン・テグジュペリ（仏）の『星の王子さま』の英題が *The Little Prince*　であることもさらに混乱のもと

翻訳と誤解

それぞれがおそろいの題名を持つが…？

『小公子』『小公女』はそもそも無関係な題名であった

『家なき子』①は天使のような本当の母親を探して長旅をする物語　母子もの＝日本古来の少女小説のテーマ　そもそも翻案もので、レミを「久美子」とするものもあった。

『小公子』天使のような無邪気な子どもと家庭の天使の物語　母子一体性＝母親向けの家庭雑誌に初翻訳が載った

『…女』は『…子』の亜流ではないか、同じ作品ではないかとの誤解がある

『家なき子』と同題名のドラマは、女の子が主人公でそのセリフが流行語になった

『小公女セーラ』のアニメにおける「いじめ」「耐え忍ぶ」テーマの強調

『…子』は外向き、『…女』は内向き、というステレオタイプ的見方が主流。

すべて、幸せな結末で終わり、めでたしめでたしにみえるが,,,

3

原作の意味や意図

① 『家なき子』　＜家庭がなくて＞　フランスの地理、産業を学びつつ、独り立ちしていく孤児の少年が、思いがけない本当の母親と兄弟を見つけ出し、幸せになる話　「旅芸人や子ども労働者の生活の現状」＋「母の探索」＋「貴種流離譚」
フランス→イギリス→フランス→スイス→イギリス

② 『小公子』　＜小フォントルロイ公＞　突然イギリスの爵位の後継者と判明したアメリカ人の少年が、アメリカ嫌いのかたくなな老伯爵の心を次第にとかしてゆき、最終的に祖父と母を結びつける話　「貴種流離譚」＋「息子が結婚した外国人の嫁を嫌う祖父を孫がとりもつ」＋「領地の小作人の悲惨な状況を訴え、改革を促す社会主義的テーマ」＋「アメリカとイギリスの和解」アメリカ→イギリス

③ 『家なき娘』＜家庭の中で＞　インドからフランスへ帰る途中、父母を失った少女が、身元を隠して祖父の工場に入り、努力の末、キャリアアップして祖父の秘書となり、孫だと身元を明かす話　「息子が結婚した外国人の嫁を嫌う祖父を孫がとりもつ」＋「労働者の悲惨な現状を訴え、改革を促す社会主義的テーマ」
（インド→ギリシア→クロアチア→ドイツ→）フランス、パリ→マロクール

④ 『小公女』＜小さな王女さま＞　寄宿舎学校に預けられたお金持ちの少女が、財産や後ろ盾を亡くし、階級的没落を経験するが、隣人が亡父の友人と判明し、再びお金持ちの養女となる話　（インド→）イギリス、ロンドン

4

類似点　①②は主人公が実はイギリスの貴族の跡取りだったとわかる
③④は主人公がイギリス・フランス・インドに関わりを持つ
①②③は旅の物語　ただし旅がメインになるのは①のみ
①②③④ともに父親はいない　①②は主人公と母、③④は主人公と疑似　父親の結びつきが強調される

②③は勘当された父と、勘当した祖父の間を孫が取り持つ
③④は貧しくても誇りを失わず自らを王女様に例える主人公
①③④は孤児の物語　たったひとりで世の中の荒波を乗り越え家族に出会う
①②③は主人公が肉親に巡り合う
①②③④ともに産業革命が生み出した悲惨な貧困状態を描く
①②③④ともにその貧困を救うのはノブリス・オブリージュだとしている

5

舞台となった時代と場所

① 19 世紀末のフランス、高価な絹の産着で捨てられていたレミ少年。貧しい村から、ヴィタリスという旅芸人に連れられて、フランス各地をめぐり、各地の環境や暮らし、職業を学ぶ。地図参照。イギリスの貧困街、スイスの別荘地にまで至る。厳しく美しい自然、農業、炭鉱業の危険、大都会の暗部、浮浪児の集団を使う親方などが描かれる。

② 19 世紀末のニューヨークから始まる。階級制のない社会から、イギリスの爵位継承者へ移行するセドリック少年。だんだんアメリカのほうが力が強くなりつつあった時代、歴史のあるイギリスと自由の国アメリカ、その対立と和解を描いた。

③ 19 世紀末のフランス、インドからフランスへ旅してきた親子。途上で親を亡くした混血の少女ペリーヌは親戚のいるマロクールを目指す。かたくなな祖父の工場に女工として身の上を隠して近づき、認められるまで。技術国イギリス、原料産出国インド、新しい工場のあるフランス。インド生まれの英語力の勝利。

④ 19 世紀末イギリス。インドで軍隊にいる父、フランス人だった母、ロンドンの寄宿舎学校に預けられたセーラは、フランス語が得意。父の死後、学校の下働きとなるが、隣に越してきたインドから来た紳士に引き取られ、お嬢様に返り咲く。

6　評判の変遷と現代の読者